

beyond2020始動!

文化プログラムシンポジウム in 大阪

宮田亮平氏・鳥井信吾氏・塩見有子氏・榎田隆二郎氏・佐々木洋三

中之島・天満天神エリアのビジョンを語る  
中之島アイランド・ミーティング

寺井種伯氏・楠見晴重氏・藤尾政弘氏・高島幸次氏・  
村西利恵氏・原野芳弘氏

🌸 日本万国博覧会記念基金

平成29年度助成先事業の紹介

🌸 アーツサポート関西

第3回上方落語若手噺家グランプリ2017  
桂米輝さんが優勝

関西から

文化力  
POWER OF CULTURE

# beyond

新たな文化振興モデルの構築に向けて

# 2020 始動!

**オ**リンピック・パラリンピックはスポーツの祭典であると同時に、文化の祭典でもあります。文化庁は、2020年の東京大会で日本が世界中から注目される機会を活かし、日本各地の多様な文化を世界に発信するとともに、2020年以降(beyond 2020)に向けた新たな文化振興モデルの構築を目指しています。このシンポジウムは、関西・大阪の特色ある地域文化の魅力を世界に発信する文化プログラム実施の機運醸成と、2020年以降のレガシーとして新たな文化振興を官民連携で推進する第一歩となるものです。

<報告>

## 文化プログラム シンポジウム **in** 大阪

2017年3月2日 / 国立文楽劇場(大阪市中央区)

主催：文化庁

共催：公益財団法人 関西・大阪21世紀協会



モデレーター  
佐々木洋三  
関西・大阪21世紀協会  
専務理事



## 基調講演 文化庁長官 宮田亮平氏



### 文化庁の進める文化プログラム

文化庁は、2020年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会を、アスリートだけではなく、すべての方々为主役になれる祭典にしたいと考えています。そして2020年以降も視野に入れ、日本各地に息づく多様な文化を活かし、世界に誇るものとして未来へ継承していく活動を「文化プログラム」と位置付けています。

国や地方自治体、公式スポンサーなどが実施する文化プログラムには、オリパラ組織委員会公認の「文化オリンピック」のロゴマークを印刷物などにお使いいただけます。また、非公式スポンサーであっても、日本文化の魅力を発信する文化プログラムは、政府が進める「beyond 2020プログラム」に申請いただければ、「beyond 2020」ロゴマークを使うことが可能です。



「beyond 2020」  
ロゴマーク

### 文化と観光と経済は三輪

2016年に文化庁長官に就任して以来、私は文化庁を変えたい、面白くしたいという思いで仕事をしてきました。豊かな文化は継続的に経済を支えることができます。経済はいったん沈んでも回復しますが、文化は一度途切れると新しい芽は出ません。企業による文化支援も欠かせませんが、もっと重要なのは皆さん一人一人が身近にある文化を常に心の中に持ち、大切に育てていくことです。

東京藝術大学の私の後任の学長で、ヴァイオリニストの澤和樹さんが使っているガルネリというヴァイオリンは、澤さんが大学生のときに篤志家が集まって購入し、貸与しました。当時は3000万円ほどでしたが、今は数億円にもなっているでしょう。文化・芸術はお金に換算できるものではありませんが、このように生活の中で価値が醸成されていくのです。

日本文化の素晴らしさを世界に伝えていくため、まさに文化と観光と経済の三輪により進めている取り組みの1つが、上野「文化の杜」構想です。上野には20を超える文化施設があり、世界最高水準の文化資源が集積しています。現在、年間1,300万人の来訪者があり、これを2020年までに3,000万人にするのが目標です。そこで来訪者により楽しんでもらい、集客につなげる仕掛けの1つとして、1枚で3館を回れる1000円の1日パスポートをつくりました。最終的には全館回れるようにする予定です。

2016年3月に開催した「上野 文化の杜 アーツ・フェスタ」では、東京藝術大学の女子学生らによる「芸術サンバパーティ」やシンポジウム、映画、コンサートなど多彩な催しに、3日間で30万人以上の方々にご来場いただきました。少しの工夫でこれだけまちの賑わいが創出できるのです。安倍首相もおいでになり、菅官房長官からは「上野の杜が世界の

観光客をひきつける魅力的な文化施設に成長することを心から願う」と激励をいただきました。

また、今年3月には、学生たちの協力で「Arts in Bunkacho ～トキメキが、爆発だ」というイベントを、登録文化財である文化庁庁舎のオープンスペースを開放して開催しました。大学の知名度ではなく作品の面白さを選考基準として、全国芸術系大学コンソーシアム加盟大学の学生や卒業生、修了生などの作品の展示のほか多彩な演奏会などを行い、とても楽しい発信ができました。

こういうイベントをするときに忘れてならないのは、英語、中国語、韓国語など多国語で表現することです。世界の人に意味が伝わるように配慮することはとても重要です。

### あなたとともに文化プログラム

私は、東京都が水辺空間の賑わい創出を目指すプロジェクト「隅田川ルネサンス」の座長をしていました。ご承知のように、世界の4大文明は川を中心に起こっています。ところが、東京都心には大阪と同様に多くの川が流れているのに、建物は川に背を向けていました。そこで私たちはLEDを内蔵した光球10万個を隅田川に浮かべ、川面を光で一杯にする「東京ホテル」というイベントを開催しました。

第2次大戦直後の一時期、隅田川の水は水泳大会ができるほどきれいでした。空襲で川の周辺が焼け野原となり、人が住まなくなったからです。ところがその後の復興で一気に水は汚れました。2020年の東京大会のときには、隅田川が再び水泳競技の会場になるぐらいきれいになってほしいなと思います。もちろん、大阪の淀川も全国の川についても同じです。みんながちょっと心を入れ替えて環境をよりよくしていくことも、1つの大きな文化だと思います。身近にある資源を守り育て、上手に発信していくことが、まさしく世界に対して日本の文化を誇ることにつながります。「あなたとともに文化プログラム」。皆さん一人一人が、文化は他人事ではなく、みんなと一緒につくっていくものだと考え、実行していただきたいと思っています。



「上野文化の杜 アーツ・フェスタ」(2016年3月25～27日)  
(文化庁提供)

## 関西・大阪の魅力を発信するために



**塩見有子氏**  
特定非営利活動法人  
アーツイニシアティブウキョウ  
理事長



**鳥井信吾氏**  
サントリーホールディングス  
株式会社  
代表取締役副会長



**榎田隆一郎氏**  
株式会社榎田酒造店  
代表取締役



**宮田亮平氏**  
文化庁長官

(50音順)

司会進行 佐々木洋三(関西・大阪21世紀協会 専務理事)

### 文化資源の産業化と取り組み

**佐々木** 世界各地で欧米型のリベラル・デモクラシー(資本主義・民主主義)が行き詰まりを見せる今、大衆の不満はポピュリズムを生み出し、グローバリズムと保護主義の分断に揺れています。一方、日本では2008年以降人口が減少に転じ、未だ経験したことのない超高齢化・超少子化時代に突入しました。こうした試練を乗り越えていくカギは「文化」にあります。とくに多神教の中で育まれてきた多様性を享受する精神や寛容の心など、日本が大切にしてきた精神文化で世界の安定と平和に貢献するときにきたと感じます。

関西は、漁村・農村文化、商人文化、町人文化、宮廷文化などが重層的にあり、日本文化の礎を築いてきました。その関西で日本の文化政策を考え、新たな地域活性化のモデルを示していくことは極めて意義深いことだと思います。すでに2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けた文化プログラムも全国津々浦々で展開され始め、文化庁の関西移転に向けた実証実験も本格化しました。

そこで、関西・大阪が文化資源をいかに活用して地域活性化のモデルをつくり、どんな文化プログラムを展開して世界に発信していけばよいかをテーマに、各地からお集まりいただいた皆さんに、それぞれご専門の立場からご意見をいただき、考えていきたいと思います。はじめに皆さんの日頃の文化活動について伺いいたします。まずは、東京からお越しの塩見さんから、お願いいたします。

**塩見** 私たちは現代アートの面白さや複雑さを多くの人に知って頂くため、2002年にNPO法人のエイト(Arts Initiative Tokyo:AIT)を設立しました。現代アートは一般的に馴染みにくいといわれるかもしれませんが、実はとても奥が深いものです。東京は国際都市で情報もあふれているのに、アートシーンには足りないものがたくさんあると思っていたことも設立動機の一つです。

エイトは、キュレーター\*、コーディネーター、コレクター、弁護士と一緒に、現代アートと視覚文化を考える場をつくり、現代アートにアクセスする方法を広げ、増やし、高める活動を通して、その楽しさや驚きを伝える活動をしています。その1つが2001年に立ち上げた「MAD(Making Art Different)」という現代アートの学校です。当時、日本の美術系大学にはキュレーションを専門とする学部がなく、キュレーターを目指す学生は、留学するしか手だてがありませんでした。MADでは、そうした人材育成をはじめ、作品を世の中に出す戦略的手法や社会人がアートを学ぶ場として機能するようコースを設定し、すでに2,000人ほどの修了生を輩出しています。最近では、アートが趣味というより、キャリアチェンジして起業したいという人や、自分の会社でアートプロジェクトを立ち上げたいという職業的な動機で受講する人が増えてきました。社員のインシアティブによりアートプログラムが実現するのも近年の傾向で、これを継続させるためには、企業トップの理解がとても大事だと感じています。

また、2003年には、世界各地からアーティストを招いて一定期間滞在してもらい、作品制作や国際交流を行う「アーティスト・イン・レジデンス」という仕組みを立ち上げました。例えばスリランカやカンボジアのアーティストに3か月ぐらい滞在してもらい、日本の文化を知ってもらうとともに、作品制作と発表を行ってもらいました。

\*展覧会の企画などを行い、現代美術と社会の橋渡しをする専門職。



「アーティスト・イン・レジデンス」で提供された住宅と交流風景(AIT提供)

**佐々木** 富山からお越しいただいた榎田さんは、どのような活動をされていますか。

**榎田** 私は富山県の東岩瀬町という港町で酒造会社を営んでいます。ここで20年前から、古い家並みをリフォームし、まちをきれいにする取り組みを続けています。最初は、トタン張りの銘木店を蕎麦屋に変えるプロジェクトでした。東京の蕎麦屋さんのように、インテリアが集まり、つまみを食べ、お酒を飲む文化に憧れがありました。1万円払って懐石料理を食べないと日本の良さを感じられないというのでは、楽しくありません。1,000円で美しい日本を感じられる空間をつくりたかったのです。続いて食堂や信用金庫、釣具店、スナックなどをリフォームし、まちは少しずつ生まれ変わっていきました。

北前船の廻船問屋が多くあった地域は、家の持ち主が県外に移住し、ほとんどが空家になっていました。100年以上の歴史ある家ばかりです。そこで私は、富山市が5年間の期間限定でつくった支援制度も活用してそれらを一軒一軒買い取ってリフォームし、ガラス作家や陶芸作家、彫刻家など、若いアーティストに住んでもらい、創作活動を行ってもらっています。建物の一部をギャラリーにしているところもあります。また、北前船廻船問屋の大きくて古い土蔵がありましたが、解体して駐車場にするのはあまりにもったいないので、大がかりな修復をして日本酒を売る店にしました。日本には格好いいワイン屋さんが多いのに、日本酒を格好よく売る店がなかったので、自分で建てたわけです。

私はかつて関西に7年ぐらい住んでいたことがあり、帰省で列車に3時間乗っている間、写真を撮りたくなる風景が

**佐々木** ビフォー・アフターがはっきり分かる取り組みですね。次は大阪を代表して、サントリーホールディングス株式会社副会長の鳥井さんにお伺いします。

**鳥井** サントリーの創業者・鳥井信治郎のお話からいたします。信治郎は、利益の3分の1はお客様、3分の1は会社、残りの3分の1は社会に還元するという「利益三分主義」を事業理念としました。100年以上経った今もこの理念に則り、公益財団法人のサントリー芸術財団やサントリー文化財団、サントリー生命科学財団や、社会福祉法人邦寿会、学校法人雲雀丘学園の5つの財団を通じて文化・社会貢献活動を行っています。

また、信治郎は晩年3つのことをよく口にしました。1つ目は、積極的になんでもやっという「やってみなはれ」。2つ目は「陰徳を積む」、「天地の報恩(天と地の恵みに対して恩を返すこと)」。そして3つ目が「親孝行な人は立派になる」です。メセナや社会貢献とは理屈ではなく、天地の報恩や親孝行のためにしていることが、結果として社会貢献になっていると信じていたのです。終戦直後、大阪駅付近にあふれるお腹をすかせた貧しい人たちのためにお粥を配りたいと思った信治郎は、「日本中で人々が飢えているのに、駅前の人たちだけに施しても効果はない」という部下の進言を聞き入れず、「黙ってみてられない」と炊き出しを敢行したり、収容施設をつくりました。すなわち彼の社会貢献や文化活動は、理屈ではなく心の動きに端を発しています。

私どもの文化財団では、専務理事や常務理事に若くても非常に優秀な人を充てています。私たちは文化財団を会社の本来の事業活動を行なうのと同じ気持ちで経営しており、ここにも創業者の思いが受け継がれています。

## 地域のレガシーを探る

**佐々木** 先の宮田長官のお話にもありましたが、地域の文化資源やレガシーを掘り起こして磨いていくことが、文化プログラムにつながっていくのだと思います。そこで皆さんに、地域の文化的レガシーについてお伺いしたいと思います。

**榎田** 世界的な傾向ですが、大阪に来て御堂筋を通ったとき、沿道にはルイヴィトンやエルメス、マクラーレンといったヨーロッパのブランド店が立ち並び、一体どこの国に来たのかという感じがしました。また、ワインを造っているヨーロッパ人の友人から、「日本にはラグジュアリーという言葉がないから、

世界を魅了することはできない。そもそも日本の国際空港の免税店で売っているのはヨーロッパブランドばかり。そうしていつまでたってもヨーロッパの文化をありがたがっているから、日本酒も世界で売れないのだ」といわれ、悔しい思いをし



釣具店のリフォーム



空家を改装して一部をギャラリーに活用



北前船廻船問屋の土蔵を日本酒販売店に改装  
(榎田酒造店提供)

一つもなくて、どうして日本はこんな醜い国になってしまったのかと残念に思っていました。今日、富山から大阪に来る途中も、同じ気持ちでした。だからこそ、自分のまちをきれいにすることに取り組んだのだと改めて思いました。

たことがあります。そこで日本酒を世界で売る方法を考えたところ、伝え方が悪かったことに気が付きました。酒瓶のラベルには、漢字中心の日本語が書かれています。先の友人は、「読めないラベルを貼って売りに来ても買う気にならない。本当に伝える気があるのなら、我々に分かるようなプレゼンをしなくては評価されない」ともいっていました。文楽や能・狂言などの伝統芸能も同じです。能が幽玄の世界を表現しているといくら説明しても、テロップがなければ分かりません。ましてや日本人自身もよく分からないのに、ヨーロッパ人が分かるはずがありません。世界の人々が理解できるよう伝え方を工夫しなければ、結局は誰にも受け入れられず、レガシーとして続いていかないと思います。

**佐々木** 「日本にはラグジュアリーという言葉がない」、「日本酒のラベルにヨーロッパ人は関心を示さない」という梶田さんのお話でしたが、フランスワインを販売するサントリーの鳥井さんはいかがですか。

**鳥井** サントリーは30年前から、フランスのボルドー地方にワイン畑、醸造所、酒蔵、住居を併せ持つ「シャトー・ラグランジュ」を所有しています。当地の生産業者は、「コマンドリー・ド・ボルドー・ポンタン騎士団」というあえて格式張った名前を付け、女優やスポーツ選手、政治家などを名誉騎士に叙任する儀式を行い、それをマスコミを通じて大々的に発信しています。私も過去参加したことがあります。

ワイン造りはフランスの伝統的な産業であり、シャトーの多くは17～18世紀に作られた文化遺産です。ワインの格付け機関がワイナリーの格付けを行ったり、ワインと料理を結びつけてシェフやソムリエを育て、レストラン産業やワインジャーナリズムも発達してきました。こうしてワイン産業を誰もが分かりやすく、楽しめるようにしてきました。人口6,000万人のフランスに毎年8,000万人の観光客が訪れて、フランスのワインを楽しんでくれます。まさに文化の産業化ですが、このことは日本のワイン産業でも大きな課題だと思います。

**梶田** 私たちの酒蔵は長い歴史があっても、建物はトタン張りや古く、生産者に田んぼや文化とつながろうという意識はありません。私はそんな蔵元たちをフランスに連れて行き、現地のワインビジネスを見つけたところ、皆びっくりして考え方が



シャトー・ラグランジュ(サントリーホールディングス提供)

変わりました。ポンタン騎士団に倣って紋付姿の「酒サムライ」を結成し、年に1回、京都・下鴨神社でミスユニバースなどを招いて叙任式を行います。そして芸妓さんをたくさん呼び、盛大な宴を催します。フランスがワインビジネスと文化を結びつけて成功しているのを見て、日本の若い蔵元たちも負けてはならじと遊び心のある活動を始めているのです。

**佐々木** 文化の産業化について、お二人に分かりやすい例を示していただきました。塩見さんも、アートという文化で企業人の発想を変える活動をされていますね。

**塩見** エイトでは、アーティストが企業に入り込んで作品づくりを行う「アート・イン・ザ・オフィス」に取り組み、今年で10年目を迎えます。

マネックス証券という会社のプレスルームの壁に1年間展示する作品案を公募して、その中から1名を選んで実際に制作してもらうのです。審査員にはアート専門家だけでなく、同社の松本大CEOやビジネス界で活躍しておられる方々にも加



「アート・イン・ザ・オフィス」での展示(2015年)(AIT提供)

わっていただき、ビジネス的視点でのご示唆もいただいています。作家がプレスルームに約2週間通って作品を創ることと併せ、ワークショップも開催して、社員とアーティストが知り合うきっかけづくりも行っています。2008年に始めた当初は、ほとんどの社員の方が、自分たちとは異質な人間がいるのを遠巻きに見ている感じでしたが、毎年継続していくうちに面白がって来てくれる人が増え、食事会が企画されたり、作品購入にもつながってきました。若い作家にとっては、作品を買ってもらえると次への自信につながります。

**佐々木** アーティストの育成と同時に、企業人との交流機会を増やし、企業の活性化や創造性をも高める取り組みなのですね。宮田長官は、皆さんのこれまでのお話を聞かれてどのようにお考えでしょうか。

**宮田** 塩見さんが取り組まれている現代美術というのは、芸術的なテクニックよりアイデアの閃きによるところが大きいものです。アイデアが閃くのは、乗り物、寝床、トイレにいるときだといわれますが、私の作品の構想もほとんどがトイレと枕の上で思いついています。また、梶田さんのプロデュースによって、まち全体の雰囲気が大きく変わりました。古い建物のリニューアルとはいえ、そこに大きな意味があります。そしてギャラリーのある家では、作品を展示してあるのに売らないなど、どこか変なのです。しかし、この「変」というのが、人の心をすぐくすぐるのですね。鳥井さんがお話しされたサントリー創業者

の3つの言葉「やってみなはれ」、「陰徳を積む」、「親孝行な人は立派になる」は、創造活動にも通じる素晴らしい言葉だと思います。

## 官民の連携と協働に向けて

**佐々木** それでは、文化による地域の活性化を進める上で、官民の連携や協働について伺いたいと思います。梶田さんの取り組みは、民間資金だけで行われたのですか。

**梶田** 先ほど、申し上げた富山市の支援制度も活用しながら、古い家をリフォームして、まちの姿を変えていきました。宮田長官の前では言いにくいのですが、文化庁の文化財専門家が介入すると、古い建物を当時のままに復元するよう指導されます。そのため新しい材料や色が使えず、思うようにリフォームさせてもらえません。しかし文化庁のいう通りにしないと、国の補助を得ることができないんですね。私はそういう考え方が嫌いなので、国からの補助に頼ろうとは思いませんでした。

**佐々木** ということは梶田さんは、ご自分の資金を中心としてプロジェクトを推進されたのですか。アーティスト・イン・レジデンスもそうですか？

**梶田** 私が建物を買って改装し、利益なしでアーティストたちに販売、賃貸します。また、アーティスト支援の気持ちを込めて、作品を納めてもらったりもしています。当社が中元や歳暮に使っているグラスやお皿はそうしたものです。但し、どんな作品でもいいというわけではなく、いろいろと注文を付けて作ってもらっています。

**宮田** 文化庁に対する梶田さんのご意見は私も同感です。本当に「変」を起こして、明日を感じられるような文化行政をしなければなりません。

**梶田** 初めて文化庁を訪ねたとき、職員の方々はとても良い人たちなのですが、オフィスは書類の山、お役所的な雰囲気の中で、本当に若い人たちをサポートして新しい日本の文化財をつくることができるのかと疑問に思いました。文化庁は文化財を修復するだけなのかと。宮田長官、失礼を申し上げます。

**宮田** いいですよ。私が文化庁長官に就任したときの第一声は、「あなたたちは暗い」でした。文化庁には良いところはいっぱいあるのですが、新しいことに挑戦する勇気が少し足りないんですね。

**佐々木** 塩見さんもアーティスト・イン・レジデンスの活動をされており、本来は官がすべきことをNPOがしているとお話されていました。

**塩見** アーティストの活動を支援する国の補助金は1997年頃からでしたが、数年で打ち切られました。その後、文化庁は2011年から海外発信拠点形成事業としてアーティスト・イン・レジデンスに対する補助金を出すようになりましたが、私たちが始めたのはそれ以前の2003年のことでした。

日本に来て、日本の文化に触れたいと思うアーティストは常にいます。そこで私たちは、アパートさえあればアーティスト

を招いて東京型のレジデンスができるのではないかと考え、事業を始めました。幸い、スタートアップ時には篤志家がアパートを安く提供してくださったのですが、それ以上の資金はなく、行政の補助はもとより、支援してくれる人も企業もいませんでした。そこで海外に支援先を求め、スウェーデンに行きました。

当時、スウェーデンはアーティストを海外に派遣する文化政策を進めており、私は政府系の文化機関に直談判して支援を求めました。先方は、私のような設立して2年ほどしか経っていない東京の小さなNPOの話をよく聞いてくださり、「では、一緒にやりましょう」と承諾してくれました。こうしてスウェーデンの文化財団と提携し、その後、オランダのモンドリアン財団など、海外のさまざまな文化機関と提携して、それぞれの国のアーティストを日本に呼ぶことができました。2011年からは文化庁の補助金もいただいています。

**佐々木** 塩見さんの信念と情熱に、海外の文化財団が心を動かされたのですか。アメリカのカメラマン、エヴァレット・ブラウンさんも、日本人の和の精神や寛容の心などを世界に発信していく手段として、アーティスト・イン・レジデンスを大いに推奨されています\*。日本の魅力を肌で感じ、作品を通して、あるいは母国に帰ってそれを伝えてくれるからです。さて、鳥井さんは民間版のアーツカウンシル「アーツサポート関西(ASK)」の運営委員長をお務めですが、その取り組みについてご紹介ください。

\*本誌126号(2017年春号)に掲載

**鳥井** ASKは、関西経済同友会の提案をもとに、アーティスト支援を目的として2014年4月に設立されました。かつての大阪は、経済人は文化を楽しむ文化人でもありましたが、というわけか最近の経済人・企業人は文化への関心が薄い。それではいけないということで、今一度、企業人＝文化人に戻ろうと立ち上げたのがASKです。

ASKは、企業や個人の寄付でアーティストを支援する仕組みです。例えば、若手ヴァイオリニストをベルギーに送り、世界的ヴァイオリニストであるオーギュスタン・デュメイ氏のレッスンを提供する機会を提供したり、アートコーポレーションの寺田千代乃社長は、若手唸家の育成を目的に「上方落語若手唸家グランプリ(天満天神繁昌亭)」への支援を続けておられます。また、京阪神ビルディングの中野健二郎会長は、若い世代が500円で文楽を鑑賞できるプログラムを創設され、現在は岩谷産業の牧野明次会長が引き継いでおられます。他にも現代美術の作家や劇団への支援など、市民と企業が協力してアー



オーギュスタン・デュメイ氏(左)と内尾文香さん(吹田市出身/東京藝術大学1年生<当時>)

ティストを支援する仕組みがうまく機能し、約3年間の活動で9,200万円が集まりました。私たちが一番望んでいるのは、そうして寄付をした人たちがアーティストと交流し、彼らの活動を間近で見えていただくことです。

**佐々木** 民間の立場からお三方のお話を伺いましたが、宮田長官には、官のお立場で官民協働についてのご意見を伺います。

**宮田** 塩見さん、榊田さん、鳥井さんに共通する大事なことは、文化・芸術は特別なものではなく、全ての人が共有できるものだというお考えです。だからこそ、文化・芸術に携わる若者も絶えることなく続いていくのだと思いますが、そのためにはアーティストだけではなく、道具を作ったり、場を提供したり、活動を伝えるなど、文化を支える仕事に携わる全ての人が、心地よく潤う環境づくりがとても大事です。榊田さんと富山で初めてお会いしたとき、地元の若い芸術家たちの目はとても輝き、生き生きとしていました。そんな活動ができる環境をみんなで作り上げていくことも大事です。また、塩見さんが支援されている現代アートはとても勇気のいる分野ですが、その活動を支えることで、芸術家たちは世界に発信できるし、世界から日本に来てもらうこともできるのです。私が文化庁長官に就任して1年が経ちましたが、文化庁はこれからもっと変わっていきます。皆さんには、それを感じてもらいたいと思います。

## 関西・大阪発の文化プログラム

**佐々木** それでは2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けて、関西・大阪が自らの魅力を世界に発信し、元気になっていくための文化プログラムについて、具体的なご意見やアイデアをお伺いします。

**塩見** 私たちは、企業がアーティストを支援する取り組みをはじめましたが、長く続けるうちに逆のことが起き始めました。つまり、アートが企業に金銭的価値以外の例えば、コミュニケーション向上などの効果をもたらすことがあります。大阪はビジネスのまちだと思いますので、アートとビジネスが互いを補完する関係をつくっていくことも大事ではないでしょうか。また、文化は人がつくるものです。アーティストとの交流など、作品をつくった人にフォーカスする取り組みも必要でしょう。

**榊田** 大阪の人はとても混沌とした中に生き、世界で戦える強い人間力があると思います。ところが自己満足に陥って、せっかくの強い発信力が活かされていないように思います。例えば、大阪は「食い倒れのまち」といわれているのに、食べ歩きが好きな私の仲間内では、ほとんど話題になりません。わざわざ大阪に出向いてまで、食べたいものや行きたい店がないんですね。大阪は、「食い倒れ」という言葉だけで自己満足するのではなく、世界の人に受け入れられるように、「食の都」であることをもっと上手くPRすれば、アーティスト・イン・レジデンスを利用したいというアーティストも増えるでしょう。それが簡単にできる素地が大阪にはあると思います。

**佐々木** 大阪には美味しいものがたくさんあり、腕の良い料理人も多くいますが、それを戦略的にPRする取り組みが重要なですね。鳥井さんは、これまでのお話を聞かれて、どのように思われますか。

**鳥井** 先ほど、最近の経済人・企業人は文化への関心が薄いといいましたが、なぜかという、「文化に興味がある」というと仕事をしていないように思われるからです。逆に、財務諸表をよく読むとか、経済的な数字に興味があるという、きちんと仕事をしているように思われる。しかし、本当のことをいえば、皆さん文化や芸術に関心をもっておられるのです。日頃、そういうものに接する機会が少ないため、興味があることに気づいておられないのでしょう。今日のお話にあったように、さまざまな取り組みを通じてアーティストと交流する機会を持てば、文化に対する関心は必ずや花開きます。そうすることで会社も変わっていくと思います。

**佐々木** 鳥井さんは関西経済同友会の歴史・文化振興委員会の委員長として多くの提言をまとめておられます。とりわけ大阪の歴史的遺産である大阪城を核とした取り組みに力を入れようとしています。

**鳥井** 大阪城を舞台に、世界中が注目するフェスティバルをしようという構想です。そのお手本が、スコットランドの首都・エディンバラで毎年4月～8月にかけて開催される「エディンバラ・フェスティバル」です。当地の象徴であるエディンバラ城をバックに複数のフェスティバルが繰り広げられる世界最大規模の芸術祭で、期間中は人口約50万人のまちに100万人が集まり、数百億円の経済効果と年間5千件を超える雇用を創出しています。世界から2万人のアーティストが入れ替わり立ち代わり来て、数千人のメディア関係者やプロデューサーが集まり、各国のアーティストを発掘する場になっています。文化と経済が密接に結びついて、まちの活性化に貢献しているのです。エディンバラ城の城主はエリザベス女王のご主人のエディンバラ公爵で、単にまちの中で祭りを開催するだけでなく、まちと歴史が一体となって盛り上げているのです。そして、いつも中心にエディンバラ城があります。

大阪には大阪城や生國魂神社、住吉大社、四天王寺、大阪天満宮などがあり、親水景観も豊富ですが、パンフレットでいくら丁寧に説明しても、その良さを体感してもらえません。それよりお祭りで盛り上げ、外国の人たちにも参加してもらうことで、より明確に伝えることができるでしょう。せっかく立派な大阪城があるのですから、これを活用しない手はないと思います。

**佐々木** 当協会も大阪城とその周辺を使って、さまざまな舞台芸術の祭典を行う社会実験を続けてきました。これはとてもアピール力のある文化プログラムになります。大手門前広場をステージに見立てての「オープニング・ガラ」、大阪城を借景した「西の丸ステージ」、川を舞台にした「水上オペラ」などを短く映像にまとめましたので、ご覧いただきたいと思います。

～映像上映～





大阪城サマーフェスティバル  
「オープニング・ガラ」  
(2012年7月/大阪城大手門前広場)



大阪城西の丸ステージウィーク  
(2012年7月/西の丸庭園特設ステージ)



水上オペラ  
(2014年10月/大阪水上バス「大阪城港」)  
(関西・大阪21世紀協会主催/3件共)

**佐々木** 最後に、宮田長官のコメントをいただきたいと思います。

**宮田** この映像を見て、大阪は決して川に背を向けていないことが分かりました。また、文化は私たちの身近にあるということを強く感じました。そして、それを伝えることが一番大事なのだと思いました。

「伝える」という漢字は、「人が云う」と書きます。本日、皆さんからご指摘があったように、思いは伝えなければいけません。大阪人同士、日本人同士が知らないさまざまな魅力を伝え合うことも、文化を育てていくには大事なことなのです。そし

て、そのとき大切なのは「鼻歌交じりの命がけ」です。肩の力を抜いて真摯に取り組めば、必ずや大阪は長年培った豊かな文化、歴史と伝統を発信することができます。2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けて、さらにその後も、文化プログラムを進めていきたいと思っています。ぜひ、大阪の文化資源の魅力を多くの人に伝え続けてください。

**佐々木** 本日、皆さんのお話を伺って、関西・大阪の文化プログラムを推進する上でとても多くのことに気づかされました。夢と情熱をもって取り組むことが重要だと思います。どうもありがとうございました。

## beyond2020の門出を賑やかに寿ぐ

### オープニングパフォーマンス

#### 文楽『二人三番叟』

桐竹勤十郎さん、吉田勤彌さん、  
人形浄瑠璃文楽座技芸員の皆さん



おめでたい席で披露される二人三番叟。「2020年の五輪聖火リレーのときは、文楽人形で聖火を掲げ、大阪のまちを走りたい」という桐竹勤十郎さんの言葉に、会場から大きな拍手が送られました。

### クロージングパフォーマンス

#### 一人一人の個性を謳う新曲を披露

BORO & フレンズの皆さん



BOROさんは1979年にデビューし、現在は音楽プロデューサーとしても活躍。大ヒット曲「大阪で生まれた女」や、新曲「Color Color」をBORO&フレンズの皆さんやパネリストを交えて披露しました。

# 中之島・天満天神エリアの ビジョンを語る



大川より中之島剣先を望む



## 中之島アイランド・ミーティング <報告>

2017年3月6日／大阪天満宮会館  
主催：一般社団法人 おしてるなにわ(平成 OSAKA 天の川伝説の実施団体)  
公益財団法人 関西・大阪21世紀協会



司会進行  
佐々木洋三  
関西・大阪21世紀協会  
専務理事

### 賑わい創出と魅力発信に向けた新たな議論を

関西・大阪21世紀協会は、第3次グランドデザイン(2003年3月)の中で「水の都・大阪の再生」ビジョンを提唱し、以後、経済界・大阪府・大阪市の合意のもと親水環境の整備が進められました。これに触発され、安藤忠雄氏が「市民や企業の寄付で世界に名だたる桜並木をつくろう」と呼びかけた「桜の会・平成の通り抜けプロジェクト(2004～07年)」には4億円を超える募金が集まりました。さらに民間人の知恵と工夫で大川の川面に光の天の川を描く「平成 OSAKA 天の川伝説(2009年～)」も誕生しました。この10年でこれほどビフォー・アフターがはっきりした取り組みは他に例を見ません。

このように、都市には皆が共有できる夢やビジョンが必要です。そこで、中之島・天満天神エリアのさらなる賑わいの創出や魅力発信について新たな議論を巻き起こすべく、将来の夢やビジョンを考えるシンポジウムを企画し、各界有識者の方々にご意見を伺いました。

# 面白かった中之島の時代

基調講演 高島幸次氏

大阪大学招聘教授  
大阪天満宮文化研究所研究員



## 朝廷文化とつながり

中之島は、仁徳天皇の時代に開削された大川(難波くになにわ)の堀江に、上流からの土砂が堆積してできた、いわば人工の川から自然に生まれた中洲です。万葉集には「押し照る難波堀江の葦辺には 雁寝たるかも 霜の降らくに」という歌があり、「おしてる」は難波の枕詞で「水面が光る」という意味があります。本日の主催者の名前は、それに由来しています。また、当地では850年から1224年の間、即位された天皇が国を治める力を得る重要な神事「八十島祭(やそしままつり)」が行われました。夏の風物詩となった「平成 OSAKA 天の川伝説」は、そうした日本の国の成り立ちを背景にしたイベントなのです。

## 開発の遅れが発展の契機に

豊臣秀吉は、大坂城の城下町を上町台地に沿って四天王寺から住吉大社へと南北に伸ばそうと計画しました。西方面は水辺に近く、低湿地だったからです。ところが、慶長元(1596)年の慶長大地震で人家や寺院などが壊滅的な被害を受け、南北構想が東西構想に変更されました。こうして「船場」が開発されましたが、中之島は構想外で、長らく手付かずのままでした。

その後、慶長19(1614)年の大坂冬の陣で、豊臣方が中之島の「五分一(ごぶいち)」という所に砦を構えて徳川勢の侵入に備えましたが、11月30日に陥落。これが歴史上に中之島が記録に残った最初で、私は11月30日を「中之島の日」にしてはどうかと提案しています。ちなみに五分一とは税率20%のことで、当時、中之島では農業が行われていたと思われます。

開発が遅れた中之島には人家が少なく、各藩が蔵屋敷を置くには好適地でした。船による物資の搬出入にも都合で、江戸時代には島内に41藩、堂島川や土佐堀川、江戸堀川沿いに49藩、合計90藩の蔵屋敷が立ち並び、日本経済の中心地として栄えました。ところが明治4(1871)年の廃藩置県で、中之島の蔵屋敷は消滅。明治政府は、広大な跡地に官公庁や大企業の本社を置けばよいと考え、現在の中之

島の形態ができました。石見浜田藩の蔵屋敷跡地に大阪市中央公会堂が建ち、肥前唐津藩の蔵屋敷跡地には大阪市庁舎、備前島原藩の蔵屋敷跡地には日本銀行が建ちました。

## 日々の娯楽だった船遊び

上方落語の古典『船弁慶』には、難波橋の上流で川に落ちたが水深は膝までしかなかったというくだりがあります。当時、中之島の東端は難波橋の下流辺りにあり、その上流は浅瀬になっていました。明治期には島の東端は難波橋にまで達し、浅瀬も砂洲になった様子が描かれています。

また、喜六と清八が難波橋へ夕涼みに出かける『遊山船』には、橋の上やたもとには冷やした西瓜などを売る夜店が並び、川面の遊山船(船遊びの屋形船)ではお金持ちが芸妓遊びの音曲を響かせ、飲食物や芸を売る多くの小舟が並走しているという描写が出てきます。高安月郊『水の都・畿内見物(1912年)』にも、「鮎卵、芝藤、日出などの舟生洲(ふないけす)へつけて料理をあつらえ、舟へ運び入れて更に遊」とあります。鮎卵や芝藤は料亭で、お金持ちの船では、多くの食材を積み込み、料理人もいて料亭と同じような料理を出しました。一方、一般庶民の船遊びは、網で魚を獲って調理するため、不漁のときはお腹がすいたまま帰ります。

明治時代の写真も残っており、「ばらぞの橋」や難波橋には貸しボート屋があり、多くの人が川面に出て夕涼みを楽しんでいたことが分かります。現代においても、一日だけのイベントではなく、日々中之島の水辺を楽しみ、生活の中に川が活かされることが重要だと思っています。

(高島幸次氏：1949年大阪生まれ。専門は日本近代史。平成24年度大阪市民表彰〈文化功労〉。著書『大阪天満宮史の研究』他)



貸しボートで夕涼みを楽しむ人たち(戦前の大川風景)  
(画像提供：高島幸次氏)

明治17～23(1884～90)年の中之島(参謀本部陸軍部測量局・2万分の1仮製地形図)(高島幸次氏提供)



## 水都大阪 中之島や天満天神地区の夢・ビジョンを考える



寺井種伯氏  
大阪天満宮 宮司



楠見晴重氏  
関西大学 前学長



藤尾政弘氏  
株式会社フジオフードシステム  
代表取締役社長



原野芳弘氏  
株式会社ランドマーク・  
ジャパン 代表取締役



村西利恵氏  
関西テレビ放送株式会社  
アナウンサー

司会進行 佐々木洋三(関西・大阪21世紀協会 専務理事)

### 中之島・天満天神エリアとの関わり

**佐々木** 中之島・天満天神エリアにおいては、これまで市民や企業が主体となって「桜の会・平成の通り抜けプロジェクト」や「平成 OSAKA 天の川伝説」などの地域活性化に取り組んできました。そうした中であって大阪府・市は都構想を推進してきましたが、「都」というのは器であり、今後何をすべきかという中身があまり議論されてこなかったように思います。親水整備でいえば、道頓堀は遊歩道が整備され、観光客で賑わっていますが、中之島エリアは水辺の景観こそ向上すれ、賑わいの創出や水の都の情報発信という観点ではまだ道半ばといえます。そこで、中之島・天満天神地区について新たな議論を巻き起こそうと、この「中之島アイランド・ミーティング」を企画しました。まずは、「平成 OSAKA 天の川伝説」の生みの親、原野さんから中之島・天満天神エリアとの関わりについて伺いたします。

**原野** 私は、スポーツイベントやライトアップ、水辺でのイベントなどを通じて景観を表現し、その魅力を伝える仕事をしています。私が中之島・天満天神エリアと関わったのは、大阪城公園で行われた毎日放送主催のイベント「オーサカキ

ング(2004年)」が最初です。その後、「OSAKA 光のルネサンス(2006年)」や大阪城西の丸庭園での「大阪フィルハーモニー交響楽団野外コンサート(2007年)」、「京阪電鉄・中之島新線の開通開業記念事業(2008年)」、剣先公園での「ビーチバレー・ワールドツアー日本大会(2009年)」と続き、2009年から「平成 OSAKA 天の川伝説」に参画させていただいています。この10年間、大阪城や中之島、大川の景観にとっても惹かれてこまできました。今後も中之島の面白い水辺景観づくりに取り組んでいきたいと思っています。

**藤尾** 私の実家は、日本一長い商店街の「天神橋筋商店街」で食堂を営んでいました。小学3年生のときに病気で耳を悪くして聞こえにくくなったとき、私は天満宮に行って砂の上に絵や文字を書いては消すことを繰り返して遊んでいました。そして最後にはきちんと消して、神様に手を合わせて帰ったものです。天満で生まれ、天満で育った私にとって、天神橋筋商店街や天満宮は今でも大切な心の拠り所となっています。

**村西** 私は天満宮に一番近いテレビ局の関西テレビに勤務しています。天満宮の近くには番組を制作するプロダクションがいくつかあり、そこへ行った帰りには必ず天満宮にお参りをします。中之島の芝生の上で「リバーサイドヨガ」と



OSAKA 光のルネサンス」  
(原野芳弘氏提供)



大阪天満宮(2017年7月)



大阪フィルハーモニー交響楽団野外コンサート」(原野芳弘氏提供)



中之島公園での朝ヨガ、風景  
(村西利恵氏提供)

いう朝ヨガ、をしてから出勤することもあります。天気の良い日は、川の風を感じるととても気持ちがいいですよ。スーツ姿の男性もおられます。自

転車でやってきて芝生の上でヨガウェアに着替え、終わるとまたスーツに着替えて出勤されています。このあたりはビジネス街なので休日やゴールデンウィークになると空いており、中之島の芝生公園に友だちと集まってピクニックなどを楽しんでいます。大都会の中であって、川や緑の自然を感じられる中之島は、つい行きたくなるところです。

**楠見** 私は関西大学の学長を7年間務め、昨年9月に任期満了で退任しました。関西大学は明治19(1886)年に大阪・京町堀で法律学校としてスタートし、昭和4(1929)年に夜間部の天六学舎がスタートしました。働きながら学ぶ学生が多く、法曹界で活躍する卒業生を多く輩出しました。通学路の天六商店街界隈は、安くておいしいものが食べられるとあって、学生たちにはとてもありがたい所でした。関西大学にとって、中之島・天満天神エリアとりわけ天神橋筋商店街はなじみ深いところなのです。残念ながら1994年に夜間部は閉鎖され、創立130年を機に天六学舎跡地を売却して梅田に新キャンパスを開きました。新キャンパスもかつての天六学舎のように、社会人を育てる機能を備えています。

かつての関西大学・天六学舎(楠見晴重氏提供)



## 魅力と歴史的レガシー

**佐々木** 高島先生の基調講演では、かつて中之島に貸しボートを浮かべて夕涼みをしたことや、落語に登場する中之島の風景などが紹介されました。皆さんは、中之島・天満天神エリアの魅力や歴史的レガシーをどのように感じておられますか。

**寺井** 西暦313年に仁徳天皇が「難波の堀江(現在の太田川)」を拓き、灌漑事業を進められました。当時、現在のNHK大阪放送局のあたりに「高津宮(たかつのみや)」という皇居がありました。今から1600年以上前に、大阪に都があったのです。また、日本書紀には、仁徳天皇の父にあたる応神天皇の時代に「大隅宮(おおすみのみや)」が出てまいりますし、その約300年後の645年には、孝徳天皇が「難波長柄豊碓宮(なにわのながらのとよさきのみや)」をお定めになりました。奈良(平城京：710年)や京都(平安京：794年)よりはるか昔、大阪は日本の中心地だったのです。大阪に皇居がおかれたのは、唐や隋といった海外との交流に適した場所であったことなど、さまざまな条件があったと思いますが、そういう時代を経て今日の大阪が築かれてきたのです。私は、大阪が日本最古の都だった歴史的事実を多くの人たちに知っていただき、大阪を思う気持ちをもっと持っていただきたいと考えています。

**藤尾** 子どもの頃の話ですが、朝、近所の人に会うと、きちんと挨拶をしなくては大人たちに叱られました。小学校から帰ると、実家の隣の散髪さんが声をかけてくれ、ただで髪を刈っ

通学路の天六商店街(昭和40年代)(楠見晴重氏提供)





後期難波宮の基壇跡と難波宮跡公園(大阪市中心部)。孝徳天皇がここで大化改新を行った。

てくれました。とはいえお客さんが来ると、半分刈って終わりということもありましたが(笑)…。商店街の角々には椅子が置いてあり、お年寄りが休憩できるようにしてありました。天神橋筋商店街は、そのように人に優しく、まち全体で子供を躱げ、育てる気風のあるところでした。

また、ここでは調理道具から調理服まで、食べ物のことなら何でも揃いました。私の実家の食堂では、料理を作る音や匂いもお客様に味わっていただこうと、厨房と客席の間にあまり壁を設けませんでした。7月になると天満界限は天神祭ムード一色になります。私は、父が切った西瓜を店頭に並べる手伝いをするのですが、西瓜の大きさがバラバラなので「大きさが違う」というと、父は「祭りやからええんや」と意に介しません。現在、私は多くの仲間と一緒に仕事をし、多くの店を出させていただくようになりましたが、その原点は天満天神にあり、当地の空気感も商品として全国に出していきたいと思っています。

**佐々木** 寺井さんは日本最古の都市としての大阪のプライドを、藤尾さんは天満天神のソフトパワーについてお話しされました。原野さんはいかがですか。

**原野** 天満橋に近い八軒家浜は、かつては熊野古道につながる水陸の結節点でした。大川と中之島・天満天神エリアを結ぶ水路ネットワークや、琵琶湖・淀川水系の拠点としても機能しました。こうした由緒ある八軒家浜で、現代に合った形で往時の賑わいを取り戻そうと、2009年に複数の企業と共同で「川の駅はちけんや」という情報発信基地をオーブ

ンしました。2011年からは「にぎわいXing(クロッシング)」と名付け、さまざまな交流イベントや情報発信を行っています。オープン後1年間の利用者は16万9,000人でしたが、2015年には年間40万人を超えました。大規模な商業施設のようにはいきませんが、「平成OSAKA 天の川伝説」をはじめ、花市や浜市、ヨガ、ウォーキングなど、さまざまな団体にご利用いただいています。

現在、天満橋は、船着場、川の駅、京阪電車、地下鉄などの結節点であり、水陸のアクセスをもっと活用してエリアの活性化を図ることが必要だと考

えます。例えば、現代版の熊野詣を再現するのも面白いと思います。また、川も遊覧船などが浮かんでいてこそ楽しく見えます。そうした水辺のアクティビティを増やし、多様な水辺景観を開発していきたいと思っています。

**佐々木** 北前船や三十石船に代表される海や川の交通、そして日本最古の都市としてふさわしい魅力がある場所だからこそ多くの人が集まり、その景観は磨けばもっと光るというのが原野さんの持論ですね。村西さんはいかがでしょう。

**村西** 私が日々感じている中之島・天満天神エリアの魅力は、藤尾さんがおっしゃったように、食べ物に関するものが何でも揃うことです。私は釣りが趣味で、佐々木洋三さんが師匠、釣行記や釣った魚をどう料理するかをスポーツ新聞に連載しています。魚を料理するための包丁や焼き網などの道具は、全て天神橋筋商店街で買い揃えています。また、昼食を食べに行くお店では、「釣った魚を持って来たら料理してあげよう」と言っていただきます。

このエリアには、さまざまなお店があるのも魅力です。JR天満駅近くの「せんべろ(1,000円でペロペロになれる居酒屋)」から、中之島の川沿いのお洒落なレストラン、大正ロマン漂うビルのレストランなど、仕事仲間とワイワイできる庶民的な居酒屋から、ちょっと気取って行くお店まで、幅広い選択肢があります。

**楠見** 私の専門(都市システム工学)でいえば、中之島には大阪市中央公会堂や日本銀行大阪支店、フェスティバル

ホールなどの文化施設、企業の本社など、コンパクトなエリアにさまざまな機能が集積しているのが魅力だと思います。人口が減少に向かうなか、都市を魅力的にしていくためには都市機能の集約や空間の有効活用は重要課題で、「スマート・コンパクトシティ」が世界の流れです。中之島界限は、すでにその方向に向



八軒家浜棧橋と遊歩道

かっているように思います。

また、大阪の人は、堂島で行われた世界最初の先物取引のことをあまり意識していないように思います。ハーバード大学のビジネススクールでは、堂島で発祥した米の先物取引を教材として勉強しています。先物取引やその関連産業に従事している人にとって、堂島はまさに聖地なのですね。そうした文化を再発見し、さらに魅力を高めることができるエリアだと思います。

## 地域のポテンシャルを活かす

**佐々木** 中之島・天満天神エリアの文化資源や歴史的遺産を活かし、賑わいを創出するためにはどのようなことをすればよいでしょうか。具体的なアイデアをお伺いします。

**楠見** 中之島の剣先に観覧車をつくるというのはどうでしょうか。ロンドンのテムズ川沿いには大きな観覧車があり、1999年の開業当初はガラガラでしたが、今年行ってみたら、世界各地からの旅行者などで長蛇の列ができていました。剣先からは視界を遮るものがあまりなく、都心の壮大な眺めが楽しめるでしょう。「平成 OSAKA 天の川伝説」を上空から楽しむこともできますね。また、中之島の上を通る阪神高速道路を地中化すれば、新たな地上空間が生まれ、都市機能の高度化や魅力アップにもつながります。荒唐無稽と思われるかもしれませんが、アメリカのボストンやドイツのケルンでは、そうしてまちの魅力を高めました。

**藤尾** 剣先に疾病退散を願う「昇り龍」を建て、観光集客のシンボルにするというのはどうでしょうか。人々がわざわざ行きたい場所にするには、注目されるシンボルや名所が必要です。例えばシンガポールを観光する人は、まずはマライオンを見に行きますね。たった8mのマライオンですら、

人々の興味を惹き付けているのです。最近、川を行き交うクルーズ船に海外のお客も増えていますが、中之島にはシンボルがないという声も聞きます。剣先の「昇り龍」は、ニューヨークの「自由の女神(93m)」に対抗して、100mぐらいにしようか。

**原野** 剣先公園は大阪市の所有ですが、地域の人たちが公共空間をもっと活用する方法を考え、アイデアを出すのはとても大事だと思います。天満天神エリアは歴史的にも大阪の中心であり、中之島は水の都・大阪のランドマークでもあります。ここに水を活かしたシンボルはありません。海外にはパリのシテ島をはじめ、中洲のまちとして栄えている事例は多くあります。私も、中之島に関する歴史的な逸話を可視化して、このエリアをいかにチャームングに見せるかを考えてきました。例えば、毎年7月7日に開催する「平成 OSAKA 天の川伝説」では、天満橋からばらぞの橋までの範囲に5万個の「いのり星<sup>®</sup>」を放流します。これを40万個ぐらいに増やし、堂島川や土佐堀川を埋め尽くす。すると、中之島が浮かび上がり、ギネスブックに認定されるような新たな都市景観が演出できますが、いかがでしょうか。

**村西** イタリア・ベネチアで運行しているヴァポレット(水上バス)のようなものが中之島にもあればいいですね。ゴンドラのようにコースの決まった遊覧船ではなく、乗船代が高い水上タクシーでもない、手軽な水上の移動手段です。これに乗って対岸のお店に行ったり、島内を散策したり、中之島の水辺で一日中楽しめたら素敵ですね。もちろん自分たちでゴンドラをチャーターして大川に繰り出すのもいいですが、手軽に川に出ていける手段がもっと増えればいいなと思っています。また、川に背を向けているビルがまだまだ多いですが、川も人々が行き交う集客資源だと思って、水辺に顔を向けたまちづくりをすれば、もっと素敵な中之島になると思います。そんな船遊びの楽しめる中之島や八軒家浜の実現が私の夢です。

**原野** 私たちは普段、陸側から川を眺め、陸を中心に都市化を推進してきました。その結果、護岸が切り立って船が着けられないなど、川側から見た都市景観づくりをしてこなかったように思います。かつては海や川を通して天満宮に参詣することもあったと思いますが、そうした歴史的ルートが都市化によって遮断されてしまいました。私は、中之島や天満天神エリアでは、例えば川から天満宮に参詣するルートをつくるなど、川からの視点に立って、川と陸をもっと連携させることが活性化につながるように思います。

**村西** 私を含め、旅行をする人の多くは、まずインターネットで旅先の情報を検索します。とくに若い人たちは、インスタグラム(無料の写真共有ソフト)を使って気に入った風景を探し出し、自分もその風景を撮ったり、その中に納まりたいと思います。そして現地に行き、念願の風景をバックに写真を撮って、インスタグラムにアップし、多くの人に見てもらおうのです。先ほどのお話にあった剣先公園の観覧車や昇り龍、平成 OSAKA 天の川伝説といった魅力的な風景もこうして世界中に発信され、多くの旅行者の興味を喚起するでしょう。観光集客という観点で見れば、いかにフォトジェニックなまちをつ



中之島・剣先の観覧車(想像図)(楠見晴重氏提供)



中之島・剣先の「昇り龍」のイメージ(想像図)(藤尾政弘氏提供)

るかということもポイントになります。もし、観覧車や昇り龍の建設、高速道路の地中化などが実現すれば大ニュースになりますから、報道の仕事に携わる者としては、制作段階から密着取材させていただき、大阪から発信したいと思います。

**寺井** 近ごろは、天神橋筋商店街や西天満などで新たな「町衆」が連携し、まちの活性化に向けた活動に取り組まれています。そうしたこともあって、天神橋筋商店街は全長が2km近くある日本一長い商店街だということも、ずいぶん知られるようになりました。そして全国の商店街関係者が、ここへ視察に来られるそうです。

一方、御堂筋に沿った西天満の老松町は、骨董品店や画廊が軒を連ねる静かなまちです。また、中之島の大阪市中央公会堂から大川沿いに東へ行き、天満橋を過ぎると大阪城や桜の通り抜けで有名な造幣局があります。天満天神地区には、歴史的建築物が今なお現役で使われていたり、大阪の歴史を伝えるさまざまなポイントがあります。こうしたエリアが連携し、地域のレガシーを活用することで、新しく面白い活性化のアイデアも生まれると思います。

**佐々木** 大阪は昔から「食い倒れのまち」として知られています。それを支えてきたのが良質の井戸水で、江戸時代「大坂四清水\*」と称された天満宮の水「天満天神の水」が復活されましたね。

\*天満宮の水、千日前の福井の水、道頓堀の秋田屋の水、聚楽町の愛宕の水

**寺井** 天満天神エリアは、昔からとても良い水が湧くところで、江戸時代には造り酒屋が130数軒もありました。硬度の低い軟水だそうで、昆布出汁をひくには最適な水、こうしたことも大阪の食の美味しさを支えていました。それが地下鉄やJR東西線が通ったことで水脈が切れて残念に思っていたところ、楠見先生にご助言いただいて2014年に天満宮境内で85mほど井戸を掘ってみたら、とても良い水が湧き出しました。

大阪の7月は「祭り月」といわれ、1日の愛染まつりから30日の住吉祭りまで、市内にある約150の神社全てで夏祭りが行われます。また、この時期、大阪・船場では、鯉や蛸、カイワレ、白天などを使った「祭り料理」で客人をもてなす風習がありました。これを夏の祭り時期にアピールしてはどうでしょうか。祭り料理のコンクールをしたり、それをメディアを通じて発信してもらうのです。B級グルメがブームの今、大阪人のプライドにかけて「A級料理」を安く楽しめる機会があってもいいと思います。こうした大阪ならではの食やおいしい水をもっとアピールしていただければと思います。

**佐々木** 「鳥のように自由に空を飛びたい」という夢から、自転車職人だったライト兄弟は飛行機を創り出しました。はじめに夢ありき。都市には中長期のビジョンが必要です。本日は皆さまのさまざまな夢や思いを伺いました。水の都・大阪、中之島や天満天神地区をさらに魅力あるところにするために、こうした夢を実現・推進するための議論を深めたいと思います。ありがとうございました。

「天神の水」御神水舎(天満宮境内)と「天満天神の水」



## 平成 OSAKA 天の川伝説 2017

7月7日／大川・天満橋～北浜周辺

主催：おしてるなにわ 共催：関西・大阪21世紀協会

大阪市の中心部を西流する大川は、かつては「天満川」とも呼ばれ、その川面に満天の星を映すようすは、「地上の天の川」のようでした。「天満」の名の由来である「天に星満ちる」川だったので。また、大川右岸にあった「明星池」「七夕池」「星合池」の名は、この辺りが七夕の夜に星辰信仰を行ったことを伝えています。2009年に始まった「平成 OSAKA 天の川伝説」は、LEDを光源とする「いのり星®」によって、その幻想的な景観を再現するものです。そして大阪の夏の風物詩として観光集客につなげるとともに、人々の心に愛と希望の光を灯したいという願いが込められています。9回目となる今年は、大川に5万個のいのり星® が放流され、約6万2,000人がその光景に見入りました。また、関連イベントの「天の川伝説落語会」「天の川クルーズ」「大阪七夕バル」などの関連イベントも好評でした。



# 関西の和食を世界に発信し 人類の健康と長寿に貢献しよう

関西・大阪文化力会議 2017

## インターナショナル 和食フォーラム (IWF)

2017年4月17日 / 大阪国際会議場

主催：公益財団法人 関西・大阪21世紀協会



**実施内容は次号(128号/2017年秋発行)にて詳しくお伝えします**



司会 堀井良殷  
関西・大阪21世紀協会  
理事長

### 概要

和食の人気が世界的に高まる今、日本料理店は世界で8万9,000店(2015年外務省調査・農林水産省推計)にもものぼるといわれています。しかし、その中には和食とは呼べない料理を提供している店も多く、伝統的な和食のイメージが損なわれているのも事実です。国内においては、食の西洋化に伴って若者の和食離れや肥満による疾病も問題です。こうした状況を改善し、正しい和食の普及に向けて今何が必要か。そして世界の人々の健康と長寿のために、いかにして「和食」で貢献し、地域の活性化につないでいけばよいのか。

今年4月17日に開催された関西・大阪文化力会議2017は、「インターナショナル和食フォーラム(IWF)」と題し、食文化、教育、医療、和食レストラン経営の第一人者の方々から、そうした問題に対する貴重なご意見を伺いました。

### 基調講演



#### 熊倉功夫氏

(一般社団法人 和食文化国民会議 会長)  
和食とは何か。ユネスコ無形文化遺産に登録された「和食」の定義や精神性について、さまざまな観点で解説されました。



#### ダリア カワスミオヴァ氏

(日本料理店「雅」経営)  
プラハで日本料理店を経営するカワスミオヴァ氏が、チェコでござうやこんやくの美味しさを広めるためにとった手段とは…。



#### 松澤佑次氏

(一般財団法人 住友病院 院長)  
メタボリックシンドロームによって「長寿ホルモン」が急減するメカニズムや、和食が健康に良い理由について、医学的な見地から解説。肥満が気になる方は必読。

※役職名は開催時のものです。

### パネルディスカッション

「和食と健康」「和食の危機」「関西の和食文化」「和食の将来」などをテーマに、熊倉功夫氏を含め各界の専門家が議論を繰り広げました。

#### 池田香織氏

(京都大学大学院 医学研究科 糖尿病・内分泌・栄養内科学 助教)

#### 後藤加寿子氏

(一般社団法人 和食文化国民会議 顧問)

#### 満田健児氏

(「懐石料理とよなか 桜会」店主)

#### モーリス グレググ氏

(龍谷大学 農学部 食と農の総合研究所 研究員)

#### 佐々木洋三

(コーディネーター / 関西・大阪21世紀協会 専務理事)

#### 講評：石毛直道氏

(国立民族学博物館 名誉教授・元館長)



### 関西・大阪21世紀協会 【今後の取り組み】

当協会は、世界の人々の健康と長寿に貢献する和食の魅力を発信することと併せ、例えばユネスコに登録された正しい和食のこころと形を提供する海外レストランなどを顕彰するなど、和食文化に対する正しい理解や品質の向上を促し、和食愛好者のさらなる増加を図る企画を推進したいと思っています。また、それがひいては日本の農産物・水産物の輸出や訪日旅行者の増加を促し、関西はもとより日本経済の活性化につながることを願っています。

# 62万人が和食の魅力を感じ

## 第9回「'17食博覧会・大阪」

2017年4月28日～5月7日／インテックス大阪

主催：食博覧会実行委員会、大阪外食産業協会、関西・大阪21世紀協会



色とりどりの大福餅(山形県)



4月28日に日本遺産に認定された「北前船」寄港地(左)や寄港地各地の郷土食を紹介(右)(日本の味くらべ館)

## 「日本の祭り・日本の味くらべ」をテーマに 多彩な趣向で「和食文化」をアピール

国際和食フォーラム(IWF)が開催された11日後の4月28日、インテックス大阪において和食の魅力を感じ「'17食博覧会・大阪」が開催され、会期中の10日間に62万人の来場者で賑わった。

食博覧会・大阪は、1982年から4年毎に開催される日本最大級の食のイベントで、今年で9回目を迎えた。2013年に「和食;日本人の伝統的な食文化」がユネスコの無形文化遺産に登録されて以来初めての開催となり、その魅力を感じさまざまな趣向で来場者を楽しませた。

とくに今回は、江戸～明治時代にかけて活躍した「北前船」\*をテーマに、25の寄港地が名産品をPR。開幕初日の4月28日に北前船が日本遺産\*\*に認定されたことで来場者の注目も高まり、寄港地の郷土食や地酒などをお土産として買い求める人も多くいた。

ライブステージでは日本各地の祭りを日替わりで上演し、

「宴テーマ館」では1970年の大阪万博以来の大阪登場となる「青森ねぶた」や、和食文化国民会議監修による節句のもてなし、出汁をテイストできる「うま味バー」などを出展した。また、「食とエンターテインメント」をテーマに、OSK日本歌劇団によるレビューショーが楽しめる「UTAGE館」や、親子で食育を学ぶ「新食館」、全国のご当地どんぶりや世界各国の料理やスイーツなどが集結したフードコート「食博楽市」、企業や自治体など、国内外の食を紹介する約600小間が出展。和食文化を再認識し、世界に発信する絶好の機会となった。

### \*北前船

大阪から瀬戸内海を通過して日本海(北前)を北上し、寄港地各々で商品を買しながら、さまざまな食材や生活物資、文化を運んだ大型商船。大阪の料理文化は、北前船が運ぶ昆布や玉鋼(包丁の原料)などによって育まれてきた。

### \*\*日本遺産(Japan Heritage)

文化庁の地域活性化施策のひとつで、地域の歴史的魅力や特色を通じて日本の文化・伝統を語るストーリーを認定する制度。



### 本荘武宏氏

食博覧会実行委員会会長  
(大阪ガス株式会社 代表取締役社長)

「ぐわっしょい、というかけ声は、「和を背負う」という意味から来ているといわれる。日本を代表する祭りや食が一堂に会する「祭食兼備」の食博は、大阪・関西の元気を世界に示す宴となる」(4月28日：食博開会式にて)



### 藤尾政弘氏

食博覧会実行委員会理事  
(株式会社フジオフードシステム 代表取締役社長)

「食博は、日本の味を五感で感じ、さらには夢を感じる全員参加型イベント。安心・安全を基本に、来場者に食を通じた感動を届ける」(4月17日：国際和食フォーラムにて)

いぶりがっこ(秋田県)



地酒飲み比べ(福島県)



秋田竿燈祭りの実演(4月28日)



青森ねぶた祭の実演(宴テーマ館)



日本料理コンクール作品展示(宴テーマ館)



五節句(人日、上巳、端午、七夕、重陽)のもてなしを紹介(宴テーマ館)



角煮まんじゅう(長崎県)

玉子巻きに扮して  
寿司をPR



連日盛況だったふるさとステージ(日本の味くらべ館)



各地の料理やスイーツが楽しめる屋内フードコート(食博楽市)

世界の味でお出迎え



トルコ料理コーナーにて



フランス焼菓子・ドミニクドーセにて



インド料理コーナーにて



ジャーマンビアフェストにて

# 新聞各紙が報道 万博記念基金事業に関心高まる

関西・大阪21世紀協会は、平成29(2017)年度の日本万国博覧会記念基金助成事業として、合計57件・総額9,200万円の助成を決定し、4月17日、大阪国際会議場で記者発表を行いました。当日はテレビ局や新聞社など11社16名の記者が参加しました。

記者発表では、平成29年度助成事業の中から、①元サッカー日本代表主将の宮本

恒靖氏が代表発起人となり設立されたNPO法人による、日本とボスニアの子供たちがサッカーを通じて国際交流する事業(発表者 宮本恒靖 NPO法人Little Bridge代表理事)、②現代美術家・舞台演出家のやなぎみわさんが自身の美術作品として制作したステージトレーラーを用いて、上演から舞台が撤去されるまでを作品とした野外演劇作品「日輪の翼」の公演(発表者 やなぎみわ 一般社団法人MIWA YANAGI OFFICE美術家/演出家)、③熊本城を会場として、熊本地震で被災された方を招待し復興に向けたメッセージを発信する音楽イベント(発表者 三城賢士 今こそ音楽のチカラ実行委員会実行委員長)につ



事業を紹介する宮本恒靖氏

いて、それぞれ代表者に概要や事業にかける思いなどを語っていただきました。

その後、当協会堀井理事長による助成金目録の授与や質疑応答が行われ、個別の事業に対して記者から質問が出るなど、関心の高さが伺えま



産経新聞 平成29年5月9日(夕刊・一面トップ) ※転載不可

した。翌日は新聞4紙に掲載され、助成事業の周知に繋がりました。また、後日、国外への助成事業(オークリッジ国際友好の鐘 平和の鐘楼の建設)についてのフォロー取材があり、新聞一面トップ記事(産経新聞)として掲載されました。



堀井理事長(左端)より助成金目録を受け取った各団体代表



記者発表の様子

# 平成29年度助成先事業のご紹介

57件の助成事業のうち、4～5月に実施された事業の一部をご紹介します。

## 中之島をウィーンに! 中之島発、大阪＝ウィーン交流コンサート

事業者：一般社団法人日本テレマン協会

交付決定額：120万円

実施期間：平成29年4月18日(火)、7月11日(火)、10月13日(金)、  
平成30年1月16日(火)

実施地：大阪市中央公会堂

バロック時代から古典期にいたる18世紀の音楽を専門とし、古楽器(作曲時の楽器)を使って演奏する日本テレマン協会が、18世紀のオーストリア国立図書館の演奏環境に近く、音の響きも優れている大阪市中央公会堂で演奏会を開催。「中之島をウィーンに!」をスローガンに、関西文化の活性化を目指します。

4月18日の演奏会では、  
400名の聴衆が集まり  
18世紀の音色に耳を傾けました。



(写真提供:一般社団法人日本テレマン協会)

## メリカルヴィア高校・佐野高校国際交流事業

事業者：公立メリカルヴィア高校(フィンランド)

交付決定額：70万円

実施期間：平成29年5月9日(火)～16日(火)

実施地：大阪府立佐野高校、JMSアステールプラザ(広島)

フィンランドの高校生20名と日本の高校生による青年国際交流事業。

佐野高校(大阪府泉佐野市)では、生徒と共にコミュニケーション能力を確認するための授業に参加すると共に、茶道部の茶室では、茶道体験を通して和の作法について説明を受けるなど、交流を深めました。

広島では、平和公園や平和資料館を訪れ、日本の観点から先の戦争について学び、国際協力や国際平和についての議論を深めることができました。さらに宮島厳島神社を訪れた際には、伝統建築を通じて日本文化についても学びました。

(写真提供:メリカルヴィア高校)



(写真提供:メリカルヴィア高校)



(写真提供:大阪府立佐野高校)



Arts  
Support  
Kansai



桂米輝さん

寺田千代乃 上方落語若手噺家支援寄金  
第3回上方落語 若手噺家グランプリ2017 決勝戦

## 桂米輝さんが新作で優勝

上方落語の継承と若手噺家の育成を目的として、アートコーポレーション株式会社寺田千代乃社長の寄付で設けられた「寺田千代乃 上方落語若手噺家支援寄金(500万円)」により毎年、若手噺家グランプリを支援しています。その3回目の決勝戦が今年6月20日、4回の予選の後、天満天神繁昌亭(大阪市北区)で行われ、入門4～18年の噺家40名中予選を勝ち抜いた9名の中から、桂米輝さん(32)が優勝しました。審査は在阪のテレビ・ラジオ局のプロデューサー・ディレクターらが行いました。

米輝さんは奈良県大和郡山市出身で、関西大学経済学部を卒業後2011年桂米團治に入門。決勝戦の演目は自作の「イルカ売り」で、稽古した覚えのない「イルカ売り」というネタが自分の演目であることを楽屋で知り、それ

となく師匠や仲間にも聞いても分からないまま、ついに高座に上がってパニックに陥るといふ、自身が夢で見た「恐怖の体験談」で観客を大いに沸かせました。

寺田社長から賞金20万円と記念盾を受けた米輝さんは、「決勝戦9人中、一番若手の自分が優勝でき、とてもうれしい。お客さんの熱気に助けられ、波に乗れました」と、声を弾ませました。寺田社長は「回を重ねるごとに着実にレベルアップしています。多くのお客様が、このグランプリを応援してくれています」と讃え、今後の若手の活躍に期待を寄せました。



決勝戦の感想を述べる寺田千代乃社長(左)と上方落語協会会長の桂文枝さん

### (助成事業紹介)



撮影:菅原一剛

#### 新古宮展 古民家で出会う現代アート

2017年4月1日～4月16日

伊丹市立伊丹郷町館(旧岡田家住宅・酒蔵、旧石橋家住宅)

江戸時代から伝わる最古の酒蔵「旧岡田家住宅・酒蔵(伊丹市)」を会場に、11名の現代美術家たちがさまざまな作品を展示する現代アート展です。世代を超えた作家たちが場所と向き合い、場と対話しながら作品に命を吹き込むように構成された空間の中で、来場者は深呼吸をするようにその静けさを味わっていました。



Kronberg academy © patriciatruchsess.com

#### 周防亮介 ドイツのマスタークラスに参加

2017年5月11日～18日

Kronberg Academy - Violin masterclasses & concerts

2014年の出光音楽賞を受賞するなど、若手ヴァイオリニストとして注目を集める周防亮介さん(21・京都府出身)は、岩井コスモ証券が支援する芸術家の一人。今年5月、ドイツのクロンベルグアカデミーのマスタークラスに参加して世界トップクラスの演奏者たちとともにレッスンを受講し、成果披露の演奏会でソリストに抜擢されるなど、高い評価を受けました。



撮影:松山隆行

#### N2 演劇「火入れの群」公演

2017年6月2日～4日

アトリエ劇研(京都市左京区)

新進気鋭の劇作家・演出家の杉本奈月さん(27)率いる劇団N2(エヌツー)による新作公演「火入れの群」。数式のように語られる断片的な言葉の羅列によって、通常の演劇の形態が解体され、新たな表現の可能性が浮かび上がります。杉本さんの演劇は、その発想の豊かさや高い実験性により現代演劇界で異彩を放つ存在であり、今後の活動が注目されています。

## イベント報告

関西・大阪21世紀協会は、「交流と助成」「伝統と創造」「発掘と発信」の3つを事業の柱としています。ここではそのなかのいくつかをご報告します。

交流と助成

### 交流サロン 21café 海外にはばたく大阪の舞台芸術の今

北林佐和子さん(脚本家、演出家)  
伊瑛谷門取さん(打打打団 天鼓 主宰監督)  
5月17日/中之島センタービル



1987年に大阪で創設された和太鼓グループ「打打打団 天鼓」の演出・総指揮を務める北林さんと同団主宰の伊瑛谷さんが、国内外での公演活動を紹介しました。近年、同団は従来の和太鼓演奏に演劇的要素を取り入れ、今年2月の「ロミオとジュリエット(近鉄アート館)」では、有名なバルコニーでの求愛シーンや結婚式などを太鼓で表現。オランダ演劇祭(6月9日～18日)での津波をテーマにした「TSUKUMOGAMI」を砂浜で上演するスペクタクルな演出などが、映像を交えて解説されました。講演後は、打打打団 天鼓メンバーによる演奏も披露されました。



伊瑛谷門取さん(右)と北林佐和子さん(左)



演奏を披露した坂上享さんと大谷加奈子さん

発掘と発信

### 南大阪・上町台地フォーラム 住吉大社と大和川・堺

■ 3月8日/住吉大社(大阪市住吉区)

平成28年度の第3回は、住吉大社・小出英詞権禰宜の案内で、同社の境内でフィールドワークを実施しました。その後は講義会場に移り、宝永元(1704)年の付け替えで大和川が住吉と堺を横断・西流したことにより、住吉大社の祭礼・神輿の道筋がどう変わっていったのか、土砂の堆積による海岸線の後退、新田開発などについて、小出権禰宜から話を伺いました。参加者は古地図、古文書、屏風絵を使った分かりやすい説明に、かつては地続きで同じ町であった住吉と堺の変遷に思いを巡らせました。



小出英詞権禰宜



参加者と一緒に

伝統と創造

### 住吉大社御田植神事 (国指定重要無形民俗文化財) 1800年の歴史をもつ華やかな神事

■ 6月14日/住吉大社(大阪市住吉区)

住吉大社の神事のなかで、ひととき華やかな御田植神事が行われ、御田植や舞など総勢約400人が奉仕しました。

この神事は、今から1800年前、神功皇后が五穀豊穡を祈るため住吉大社に神田を設け、長門国(現在の山口県)から植女を召して御田植奉仕をさせたのがはじまり。明治時代に入って中断しましたが、大阪新町廓の芸妓が植女となって神事廃絶の危機を救いました。その後、大阪花街連盟の芸妓が支えてきましたが、現在は関西・大阪21世紀協会(上方文化芸能運営委員会)などが、大阪の伝統的な神事芸能として支援しています。

この日、御田では約4,000人が参列するなか、御稔女(みとしめ)による神田代舞(みとしろまい)や無形文化財の住吉踊りなどが奉納されました。



神田代舞を奉納する御稔女の安田睦美さん



御田植風景

告知

### 西宮会場でも27講座を実施 ▶8月26日(土)～27日(日)/西宮市民会館 ワークショップフェスティバル・DOORS 11th

夏恒例のDOORS(7月29～8月2・6日)に、今年は西宮会場が加わりました。8月26日～27日の2日間で27の入門講座をラインナップ。子どもから大人まで、「一度やってみたかった」を実現するチャンスです。

講座例(8月26日)「美しく舞う能の謡と仕舞入門編」「色々な革で作る動物のキーホルダー」「タカラヅカ男役入門」「新しい本遊び・直観読みブックメーカー」「和楽器・小鼓入門編」「大人の塗り絵体験教室」「オリーブオイルで世界旅行」「フルーツ体験&アンサンブル」「ペーパークラフトでみんなの街を作ろう」「血廻しでヒーローになろう」「50歳からのマジック入門」「パントマイムでいっしょに遊ぼう」「狂言体験～600年前の笑いの世界」「自分らしい声をみつけよう」

会場: 西宮市民会館(阪神西宮駅「市役所口」改札北へ徒歩1分)

参加費: 1講座(90分)500円 ※参加には事前のお申し込みが必要です(先着順)

お問い合わせ: 西宮ドアーズ実行委員会事務局 ☎0798-39-1723(10:00-19:00)

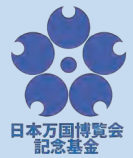
主催: IWF実行委員会(関西・大阪21世紀協会、アートサポート共同事業体)

ホームページからも申し込みができます。  
<http://www.iwf.jp>



日本万国博覧会記念基金助成事業

# 平成30年度助成事業を募集します。



助成予定総額(国内事業、国外事業の総額)：9,200万円

申請書受付期間：平成29年9月1日(金)～10月2日(月) ※当日消印有効

## 助成対象事業

平成30年4月1日～平成31年3月31日までに実施される事業で、万博の成功を記念するにふさわしく、「日本万国博覧会開催の意図」の趣旨に適った国際相互理解の促進に資する活動(①国際文化交流、国際親善に寄与する活動、②教育・学術に関する国際的な活動)。

## 助成金額の申請

- ・助成対象事業費の合計の3/4以内を上限とします。
- ・50万円から10万円単位で申請してください。
- 重点助成事業**…助成金1,000万円を上限として、数件程度採択を予定しています。  
(該当なしの場合もあります)
- 一般助成事業**…助成金300万円を上限として数十件程度採択します。

## 募集要項および申請書

当協会ホームページからダウンロードできます。  
<http://www.osaka21.or.jp/jecfund/>

## お問合せ・申請書送付先

〒530-6691  
大阪市北区中之島6-2-27 中之島センタービル29階  
公益財団法人 関西・大阪21世紀協会 万博記念基金事業部  
☎06-7507-2003 E-mail [jec-fund@osaka21.or.jp](mailto:jec-fund@osaka21.or.jp)

# 関西・大阪21世紀協会 「グランドデザイン(第4次)」を策定しました。

## 連携と協奏をめざしてー5か年の文化戦略を提唱

当協会は、1982年の設立以来一貫して「文化立都」を掲げ、その行動指針となるグランドデザインを策定してきました。現在は第3次グランドデザイン(2003年)のもとに事業活動を行っていますが、時代背景が変化し、当協会も公益財団法人認定を受けて「関西・大阪21世紀協会」として再出発したことから、改めて2017年度を起点とする「グランドデザイン(第4次)」を策定。3月15日の理事会ならびに6月14日の評議員会において了承されました。

第4次グランドデザインは、設立以来の基本である「文化立都」は不変の理念として継承し、第3次グランドデザインで掲げた都市像に一定の評価を加えつつ継続・継承。その上で、より広域的な視点で新たな目標を付加し、連携と

協奏、を旨として当協会の立場から関西・大阪が目指す方向についての提唱や、当協会が果たす役割とその行動計画について示しています。



当協会のホームページで  
ご覧いただけます。  
(総論24頁/資料編22頁)

## 関西・大阪21世紀協会賛助会員 入会のお願い

関西・大阪の活性化のため、皆様のご支援をお願いします。

### 会費(何口からでも結構です)

- 法人会員1口につき年会費10万円
- 個人会員1口につき年会費1万円

お問合せ(公財)関西・大阪21世紀協会 総務部

### 特典

- 1.協会が発行する刊行物の配布
- 2.協会が主催する各種セミナーなどへの案内
- 3.賛助会員の参考となる情報・資料の提供など

公益財団法人

関西・大阪21世紀協会

ホームページ <http://www.osaka21.or.jp>

発行日/平成29年8月8日

編集・発行/公益財団法人 関西・大阪21世紀協会

〒530-6691 大阪市北区中之島6丁目2番27号 中之島センタービル29階 TEL.(06)7507-2001 FAX.(06)7507-5945

発行人/佐々木洋三 編集協力/株式会社インサイト 印刷/東洋紙業株式会社

本誌は再生紙を使用しています。